



日本財団 難病の子どもと家族を支える地域連携ハブ拠点による
「地域との連携体制づくり」の
取り組みからの学び

CRファクトリー × 日本財団 難病の子どもと家族を支えるプログラム

Annual Report 2020



日本財団 難病の子どもと家族を支える地域連携ハブ拠点による
「地域との連携体制づくり」の取り組みからの学び

発行日:2020年4月10日
発行:NPO法人CRファクトリー



認定NPO法人うりずん



一般社団法人Burano



社会福祉法人くるみ

「地域の連携体制づくり」のあり方について

地域連携ハブ拠点それぞれの強みを活かして、様々なネットワークを築き事業を推進されていました。

あり方のイメージとしては、地域連携事業が「のびのびと生い茂る“枝葉”」、理念・ビジョンが「軸としてブレない力強い“幹”」、組織・チームが「外からは見えにくい土の中で支える“根”」であると感じました。

本事業では、幹と枝葉(理念と事業)のつながりや全体像を可視化したり、幹(理念)のさらなる共有・浸透を図ったり、土を耕し根に栄養を注ぐ(組織・スタッフのエンパワメント)、といった取り組みを行うことになりました。

また、どの地域連携ハブ拠点にも共通する「組織としての特徴」として、医療・福祉・教育などの多様な専門性による多職種チームで構成されている、ということが挙げられます。地域連携が進み、そこにボランティアメンバーや地域のステークホルダーが関わることになれば、多様性はさらに高まります。

なおさら組織・チームの質を高めることが重要であり、本事業では特にこのマネジメントを支援する研修やワークショップを行いました。

事例は次のページ ▶

本事業について

本事業は、難病の子どもと家族を支える地域連携ハブ拠点による、地域との連携体制づくりの取り組みについて、調査およびマネジメント支援を行ったものです。

取り組みを実践する3団体(社会福祉法人くるみ、一般社団法人Burano、認定NPO法人うりずん)へのインタビューを行い、さらに発展させるためにワークショップ等によるマネジメント

支援を行いました。そして本レポートによって、地域との連携体制づくりに取り組む全国の様々な団体にノウハウや気づきが展開されることを願っています。

本事業は、日本財団の助成を受けて、NPO法人CRファクトリーが実施主体となって行いました。

日本財団「難病の子どもと家族を支えるプログラム」とは

全国25万以上といわれる難病の子どもとその家族が孤立しない地域づくりを目指し、「医療」、「福祉」、「教育」、「フィランソピー」の4領域について、「医療的ケアが必要な小児に対応する訪問看護研修」、「ICTを活用した退院・復学支援事業」、「外出が困難な子どもと家族向け相談カーによる訪問」等、毎年30以上のモデルとなる事業を全国規模で助成しております。

また、「難病の子どもと家族を支える地域連携ハブ拠点」として、これまで26拠点の開設支援を決定し、2020年までに全国に30拠点整備する予定です。

NPO法人CRファクトリーについて

NPO法人CRファクトリーは、「すべての人が『居場所』と『仲間』を持って心豊かに生きる社会」の実現をビジョンに活動しています。「NPO・市民活動・地縁組織・サークル活動」の組織運営・マネジメント支援を専門として、行政や中間支援組織と連携しながら、セミナーやコンサルティングを全国各地で実施しています。

特に「団体・組織への愛着」や「スタッフ・仲間との関係性」を高める、「愛着と関係性のマネジメント」についてのワークショップ等の技術・ノウハウを強みとしています。

必要な支援・適切な情報統合のための各機関との連携

学校・教育機関、病院、自治体、など

地域福祉全般に言えることかもしれませんが、ステークホルダー間の連携・情報の統合は非常に大切です。

それぞれの接点での様子はいち側面のことに過ぎず、子どもや家族の「多面的な姿」を知ることで多くの気づきを得られて、より適切・必要な支援や関わり方が見えてくるのだと思います。

子どもや家族の複数の居場所・多様なつながりづくり

当事者団体・家族会、コミュニティカフェ、他の福祉施設や放課後の居場所、など

その人にとっての複数の居場所・よりどころがあるということが、「生きづらさ」を和らげてくれます。

地域連携ハブ拠点自身が様々な事業によって「複数の顔を持つ」ことや、地域内の他のコミュニティと連携することで、子どもや家族が多様なつながりをつくることができます。

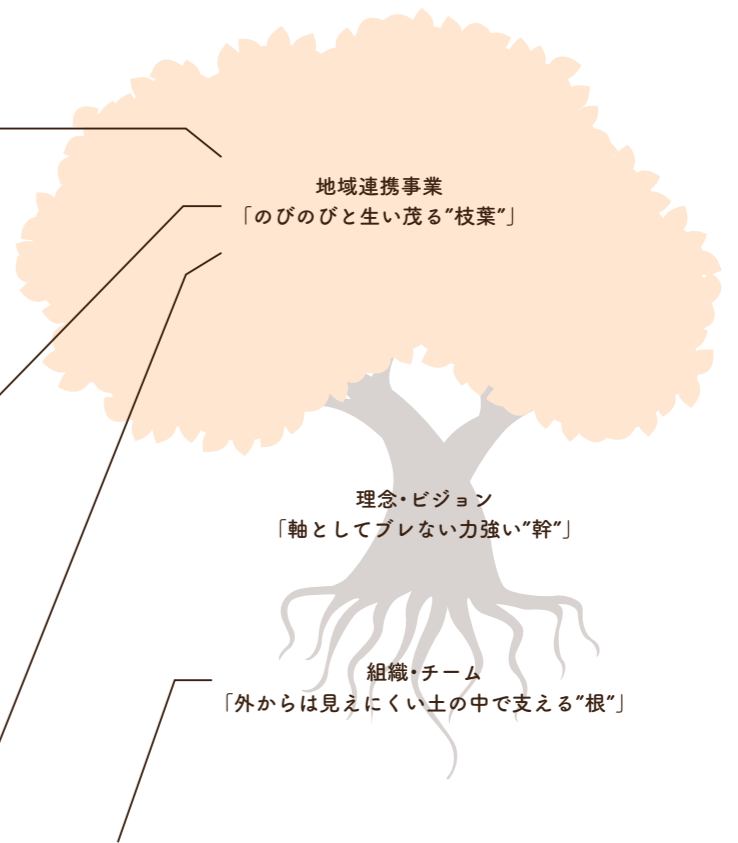
地域社会の意識を変える市民活動・まちづくり

町内会・自治会、公民館、福祉領域以外の市民活動、子ども食堂、地元企業、など

病気や障害の有無に関わらず、誰もが「あたりまえの暮らし」を送れる地域社会が実現することこそ、社会課題が解決された状態と言えます。

地域連携ハブ拠点が当事者と地域を「つなぐ」役割を持ち、地域社会の意識の変化に取り組むことは、市民活動・まちづくりとして重要な意味を持っています。

拠点を外に開いて多様な接点をつくるイベントを行うことや、子ども・家族・スタッフが地域での出会い・交流の場に出ていくことが考えられます。



地域の連携体制づくりに欠かせないこと

強くあたたかい組織・コミュニティをつくるマネジメント

「子どもと家族を支えるケア・支援」と、「地域連携を進める事業・活動」の両輪を推進していくためには、生き生きとスタッフが輝く組織基盤をつくることが不可欠です。

経験豊かな様々なケアの専門家であっても、すぐに地域連携の専門家になれるわけではありません。理念・ビジョンに基づいた事業・活動の重要性を体感し、スタッフ相互のあたたかい関係性の中でモチベーションを高め合えるような、人と組織のマネジメントに取り組みましょう。

社会福祉法人くるみ



担当者からのコメント

難病の子どもと家族が孤立しないためには、専門職だけではなく地域の団体、市民、企業との連携は欠かせません。地域連携ハブ拠点として「くるみが今後どのように地域を巻きこみ、どんな社会資源作りにチャレンジしていくのか」。スタッフ各自が考え整理する貴重な機会になりました。

理事長 岡本久子

一般社団法人Burano



担当者からのコメント

第2子が生まれてから今までかけ足だったため、これまでを振り返り、これからを考えるとといった時間が取れずに行きました。今回のプロジェクトで過去を丁寧に紐解き、キーワード抽出を行い、未来をじっくり描く時間を頂きました。また大切にしたいこともみんなと共有できました。

理事 秋山政明

！ 地域連携の背景にある理念・考え方

くるみは、「支援の必要な人が、その年齢に応じた経験と出会いの中で成長し、生きがいを持ち市民としての尊厳を守られ、最後まで安心して暮らし続けられる街をつくる」ことを理念として、右記のような事業を広く展開しています。

事業展開

1. 福祉サービス事業.....児童発達支援、放課後等デイサービス、生活介護、居宅介護、移動支援
2. 体験・居場所事業.....宿泊体験、赤ちゃん教室、学習サポートの場所提供
3. 地域つながり事業.....子ども食堂、ママカフェ、地域イベント
4. 相談支援事業.....相談受付、ピアサークル支援
5. 人材育成事業.....専門職、母親、市民向け研修の企画

- 「必要な支援」のための、病院・学校・行政・他の福祉事業所との連携
- 「経験と出会いの中で成長し、生きがいをもつ」機会をつくるための、子どもや家族の周りの関係性を広げて複数の居場所となる団体との連携
- 「市民としての尊厳を守られ、最後まで安心して暮らし続けられる街」をつくるための、地域の様々な活動の「ハブ」としてまちづくりを進める、地域コミュニティ・市民活動・地元企業・アーティストとの連携

地域連携においては、まさに理念を体現する様々な事業を通じて、関係性をつくっています。

！ マネジメント支援のレポート

今回のマネジメント支援としては、3日間に分けて以下の研修・ワークショップを行いました。

1日目	動機報酬未来ワークショップ	以下の項目で職員それぞれの思いを語り、相互にフィードバックし合うことで、信頼関係の強化につなげました。
<p>【動機】：なぜ団体の一員になろうと思ったのか？ 【報酬】：事業・活動を通じて何をしたいのか？ 【未来】：将来、何を現実したいか？どんな自分になっていきたいか？</p>		
2日目	地域連携の見える化ワークショップ	団体内部の職員だけではなく、日頃から地域で連携・コラボレーションしているパートナーであるまちづくりのNPO法人や子育て支援団体、当事者、学生、アーティストと一緒に、くるみの地域連携の見える化・整理を試みました。前述の通り、理念を体現するような地域連携を実践しているほか、パートナーとの今後の関わり方についての可能性も広がり、参加者からは以下のようなコメントをいただきました。
<p>●地域をつなぐ「コーディネーター」「中間支援」としてのくるみに期待 ●当事者の親として、子どもに「いろんなつながりを持ってほしい」と願う</p> <p>●くるみを会場として、アートワークショップや防災カフェをやってみたい ●地域みんなで子どもの成長を見守りたい</p>		
3日目	地域連携(“公益事業”)の「ありたい姿・目標」と「具体的なアクション」を語るワークショップ	日本財団の助成も受けたこれまでの公益事業の振り返りを行いながら、翌年度以降の方向性について、職員による参加型で語り合いました。
<p>【ありたい姿・目標】：親子教室、ママカフェ、パパ会、宿泊体験、日帰り旅行、カルチャースクール、様々な支援者による研修会 etc.</p> <p>【具体的なアクション】：事業の目的・コンセプトも対話によって共有。職員それぞれのモチベーションが高まり、翌年度に向けた役割分担・担当者配置が決定。</p>		

！ 地域連携の背景にある理念・考え方

Buranoは、「すべての家族が、一人ひとりの個性を發揮しながら自分らしく生きられる社会づくりの実現」を目指し、「重度障害児を預かる多機能デイサービス」と「母親の仕事支援」を掛け合わせた施設を運営しています。創業者・理事の秋山政明さんは、ビジネスの第一線で活躍し、地元・古河市の市議会議員の経験もあり、消防団員としても地域に関わり、そして、筋肉の病気がある第2子の誕生をきっかけにBuranoを立ち上げました。そのキャリアからも、地域連携においては、たとえば右記

のように展開しています。

事業展開

- 母親の働き方・キャリアを広げるクラウドソーシング・コワーキングの支援
- 地域内外の幅広いネットワークをつなぎ合わせた「プラーノ キッズフェス～みらいの森を探検だ！～」の企画
- 職員のやりたいこと・新たなチャレンジの後押し

Burano が、関わる人自身の可能性・個性を輝かせる場でありたいという願いを持って、様々に事業を展開されています。

！ マネジメント支援のレポート

Buranoとして新たな事業・サービスを始めるタイミングに、秋山さん自身の働き方の転機が重なったこともあり、まずは1対1のコーチングを数回行うことで、「これまでの振り返り」や「経営・事業の方向性」の整理・言語化をサポートしました。経営者・リーダーが自分自身の人生観・

キャリア観を自己理解できていて、これからの方向性に納得感を持つことは、団体そのもののエンパワメントにおいても非常に重要です。コーチングを通して、組織・チームとしてのありたい姿も見えてきました。

(1) 子どもとお母さんのために、という姿勢 (2) スタッフ自身の個性が輝く (3) 互いのちがいを理解する・関係性の基盤を築く	(1)～(3)を踏まえた以下のようなねらい・構成で、職員研修・ワークショップを実施しました。
【ねらい・期待効果】	●子どもとお母さんのために力を発揮できたチームの経験の振り返り ●スタッフそれぞれの価値観とちがいの相互理解・信頼関係づくり
【構成】	<p>Buranoにとって大切なエピソードの振り返り</p> <p>緊急・イレギュラーの対応が必要になった事例について、その時のチームの経験を、スタッフの動きや感情から紐解いていきました。子どもと家族を支えるためには、前例や正解のないことを手探りで進めていくようなケースも起こります。その時にこそ、チームとしての力の発揮や、大切にしている価値観が求められます。エピソードの振り返りによって、専門性や役割を超えた共通認識が生まれていきました。</p> <p>Buranoとわたしが大切にしたいことの言語化・共有</p> <p>上記を踏まえて、Buranoとして、スタッフ個人として、大切にしていきたいことを言葉にして共有しました。団体と個人、個人と個人、それぞれのこだわり・やりたいことについて、相互理解を深めました。一致させようとするよりも、むしろ「ちがいを分かち合う」ことによって、チームとしての信頼関係が高まったと感じました。</p>

認定NPO法人うりずん



担当者からのコメント

毎年、年末に「心の忘年会」と題し所内研修を行い、スタッフ自身の「想い」や「立ち位置」の振り返りを行ってきました。今回CRファクトリー様にお手伝い頂き、外部の方の視点でコメントをいただく中で、自分たちの取り組みに対し、改めて多くの気づきがありました。

事務局長 我妻英司

！ 地域連携の背景にある理念・考え方

うりずんは、「障害のある人もない人も、共に助け合える社会の実現」を目指し、人工呼吸器などの医療的ケアが必要な子どもを日中お預かりし、24時間休みなしの厳しい介護を担われているご家族に、ひと時の休息と自由な時間を提供する事業(レスパイトケア)を行っています。地域との交流も盛んで、「ふれあいまつり」などの行事では子どもたち・ご家族・地域の人々が共に参加し、年齢や障害の有無などのちがいを超えて、交流と連携の輪を広げています。

事業展開

1. 福祉サービス事業……重症心身障害児者・医療的ケア児等を対象とした日中一時支援、児童発達支援、放課後等デイサービス、居宅介護、移動支援、居宅訪問型保育、相談支援
2. 社会参加と自立支援事業…ふれあいまつり、クリスマス会、外出支援等
3. 啓発及び政策提言事業……通信の発行、小児在宅医療体制構築事業(栃木県より委託)等
4. 研修事業……暗唼吸引等研修(第三号研修)等
※うりずんは同研修の栃木県登録研修機関です。
5. 各種ネットワークへの参加・協力事業…各種チャリティー催事への職員派遣等

！ マネジメント支援のレポート

うりずんでは、毎年の年末に「心の忘年会」を行っています。職員がお互いをねぎらいあい、学び合う1日です。2019年は、以下のようなねらいと構成で行われました。

【ねらい・期待効果】

- 専門性や業務・役割が異なる職員同士の相互理解・信頼関係づくり
- 様々な視点での団体の存在意義・ビジョンの共有
- 事業・活動を通したそれぞれのやりがいの言語化

【構成】

- (1) 団体のこれまでの振り返り／今後の事業構想
- (2) ワークショップ: となりの仲間の「尊敬できる場所」
- (3) ワークショップ: うりずんは「なぜ存在しているのか」?
- (4) ワークショップ: わたしがうりずんから得ているもの「お金ではない報酬」
- (5) 理事長からのメッセージ+プレゼント
- (6) ランチ休憩・懇親
- (7) 大掃除

みなさんが非常に朗らかで、常に笑いの絶えない雰囲気です。職員自身がやりがいを感じ、生き生きと輝いていることこそが、子どもたちや家族を支え、地域につながりをつくっていく力になるのだと実感しました。特にビジョンの共有について、うりずんは「トップダウン」ではなく「ボトムアップ」を重視して、職員みんなの参加型

で考えて言葉にすることを大切にされています。施設やケア・サービスの運営だけでなく、「市民活動団体」として地域の連携・変化に力を入れているというこだわり・視点が、非常に印象的でした。

強くあたたかい組織をつくる

気づき1

今回、本事業を通して出会った地域連携ハブ拠点のみなさんから様々なことを学びながら、地域連携ハブ拠点の運営を

チームマネジメントの視点で見ると、下記のような特徴があるという気づきがありました。

- それぞれに専門性や業務分担が異なるメンバーが混在している
- 定型の正解がなく、ひとりひとりの幸せに寄り添う「福祉」の仕事である
- ケア・支援と地域連携とで異なる事業特性を両輪で運営している

強くあたたかい組織・コミュニティ



気づき2

そして、3団体がいずれも、「子どもや家族を支えるケア・支援の質」を高めることと「地域連携・ネットワーク」を広げることと同時に取り組み、そして「職員・スタッフ間の信頼関係」をつくり続ける姿勢で取り組んでいらっしゃいました。そうした取り組みを、CRファクトリーは「強くあたたかい組織・コミュニティをつくる」と表現しています。

その実現のためには、どの団体も意識的に取り組んでおられた通り、下記の3つの要素が重要になってきます。本書と合わせて、日本財団の助成を受けて制作した、別冊の『コミュニティ・マネジメントの教科書 ～強くあたたかい組織・コミュニティのつくり方～』が、全国の地域連携ハブ拠点にとっての学びにつながれば幸いです。

- 理念共有 (団体運営・事業と一緒に担っていきたい)
- 自己有用感 (やりがいがある・自分は貢献できている)
- 居心地の良さ (あたたかい・楽しい関係性を感じている)

強くあたたかい組織・コミュニティをつくる方法

